OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ポルトガル語教育と社会言語学』第1章試訳
Author(s)	Martins, Marco Antonio; Vieira, Silvia Rodrigues; Tavare, Maria Alice et al.
Citation	ブラジル研究. 2019, 15, p. 29-39
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/106594
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ポルトガル語教育と社会言語学』第1章試訳

鳥居玲奈

1. はじめに

『ポルトガル語教育と社会言語学（*Ensino de português e sociolinguística*）』はMarco Antonio Martins、Silvia Rodrigues Vieiraならびに Maria Alice Tavaresの3名の編者により、ブラジルで2014年に出版された社会言語学書である。本書の構成は以下の通りである[1]。

まえがき
1章　ブラジル社会言語学のポルトガル語教育への貢献
2章　ポルトガル語教育と教室における言語変異
3章　音声音韻上の変異とポルトガル語教育
4章　形態統語上の変異とポルトガル語教育
5章　言語変異とポルトガル語の教科書
6章　異形の分析：教室における言語変異に対する言語行動と言語意識
参考文献
編者について
著者について

それぞれの章は、当該分野の専門家により執筆されている。上述した3名の編者により執筆された1章は、ブラジル社会言語学がブラジルにおけるポルトガル語教育にいかに寄与しているかについて論じたものであり、その構成は以下

の通りである。

1節　社会言語学の言語教育への一般的な貢献
　1.1 教育現場での言語変異の扱いに関する基本的な考え方
　1.2 複数の標準規範の認知
　1.3 標準規範と常用規範との間にある類似性の認知
2節　ブラジル社会言語学の貢献：形態統語および談話語用論上の具体例
　2.1 人称代名詞の体系
　2.2 主語および目的語の性質とその現れ方
　2.3 主語代名詞の現れ方
　2.4 直接目的語の現れ方
　2.5 談話語用論上の現象
　2.6 連結詞 e と aí
　2.7 注意を喚起する談話標識と相手の同意を求める談話標識
3節　今後すべきことは何か？社会言語学ができるその他の貢献とは？

本稿では、現代ブラジルポルトガル語の形態統語上の特徴、とりわけ主語の明示に関わる研究について詳述している 2.1 から 2.3 までの和訳を試みる。

2. 試訳

2.1 人称代名詞の体系

ブラジルポルトガル語の様々な変種、あるいは様々な規範において、よく研究され、なおかつ記述されている問題の 1 つは人称代名詞の体系に関するものである。それは、この体系内において、você/vocês および a gente が人称代名詞の枠組みへと移行したことと関連づけられる有意義な変化が確認されているためである。共時・通時的視点からブラジル社会言語学の文献ですでに示された代名詞の体系に関わる広範囲な枠組みでは、標準変種／規範から常用変種／規範にいたる様々なブラジルポルトガル語の規範において、主語および補語代名詞として用いられている人称代名詞の体系に何らかの統一性があることは確かである。

この問題についてすでになされた数多くの研究を視野に入れた上で、社会言語学がブラジルにおける口語ならびに文語ポルトガル語の記述に貢献したこと

を再確認する目的で、以下の表１で Duarte（2013, p.120）が整理した代名詞の体系を示すとともにその重要性を強調したい。現在のブラジルポルトガル語の話し言葉で用いられている você（およびその変異形）と tu、ならびに nós と a gente といった変異の分布について論じる際には、それぞれ、Scherre et al.（印刷中）と Viana e Lopes（印刷中）を読むことをお勧めする。

表１：現代ブラジルポルトガル語における主語と補語の人称代名詞 － Duarte（2013: 120）によって体系化された枠組みをもとに作成

人称	主語代名詞	補語代名詞		
		対格	与格	斜格[2]
P1	eu	me	me	mim, comigo
P2	tu, você	te, lhe, **o**, **a**, se, tu, você	te, lhe, (a/para) você	ti, contigo, **si**, **consigo**, (com) você
P3	ele, ela	**o**, **a**, se, ele, ela	**lhe**, (a/para) ele/ ela	**si**, **consigo**, (com) ele/ela
P4	nós, a gente	**nos**, nós, a gente	**nos**, (a/para) nós, (a/para) a gente	**conosco**, (com) nós, (com) a gente
P5	vocês	**os**, **as**, se, vocês	**lhes**, (a/para) vocês	(com) vocês
P6	eles, elas	**os**, **as**, se, eles, elas	**lhes**, (a/para) eles	**si**, **consigo**, (com) eles/elas

この表から、P1 だけが、主語および補語代名詞としてそれぞれ異なる形式がバランスよく分布をなしているように見受けられる。具体的には、形態的に主格の標識を持つ非斜格形（eu）、対格と与格の標識を持つ弱形の斜格形（me）、そして強形の斜格形（mim, comigo）である。一方、常用変種／規範では、話し言葉においても書き言葉においても、対格としての **eu**（Ela escolheu **eu**）、対格としての **mim**（Ela **mim** viu）、および与格としての **mim**（... e **mim** disse algumas verdades）の使用も見られる。

その他の人称については、以下の(i)と(ii)で形式が変化する。

(i) 形態的に対格や与格の標識を持つ無強勢の斜格形と前置詞を伴うその他の斜格形。

(ii) いずれの機能でも用いられ、該当する斜格形を持たない代名詞。表1では下線で示した形式。

P2、P3、P4、P5、P6 に相当する斜格形の多く（表1では太字で示したもの）は、Duarte（2013: 120）が実に的確に指摘したように、その使用は「ある社会的集団に限定されているか、自然な話し言葉では使用すらされていない」ものと条件づけられる。それは、P2、P3、P5、P6 の対格形の代名詞 o、a、os、as のケース、P3 の与格形の lhe のケース、P5 と P6 の与格形の lhes のケース、P2、P3、P6 の斜格形の si および consigo のケース、ならびに P4 の conosco のケースである。P2 の対格形・与格形の te は、話し言葉でも書き言葉でもまだ多く用いられている形式であり、文体的ないしは地域的な変数によって特徴付けられた言語使用では、lhe とともに用いられることがある。

人称代名詞の体系において形態的に格を表すというラテン語から継承した性質は、ブラジルポルトガル語では、今や一般的に機能することはないようである。それは、すべての人称代名詞が、主格や対格や与格のように形態的に明示されるわけではないという理由からである。まだ格標識を有している人称代名詞については、いくらかの言語使用においては限定的に見られるが、それらの形式は、もはや子供たちが日常習得する文法の一部を構成していないがゆえに、学校で教授されなければならない。形態的に格の標識を持たない新たな代名詞の体系（それはちょうど、P3（ele/ela）や P6（eles/elas）に見られる）において、P2（tu/você）、P4（nós/a gente）、P5（vocês）での弱形と強形の斜格形は、非斜格形としても用いられる。そのため、主格や対格や与格といった格標識の付与は抽象的なものとなり、その結果、それぞれの機能は、構文上の階層関係、とりわけ、文中の構成要素の配列パターンによって示されることになるのである。(1)の例文では、問題となっている代名詞の格は、文中における代名詞の順序／関係に依存している。つまり、動詞の前であれば、(1a)に見られるように主格の標識を持ち、動詞の後であれば、(1b)のように対格の標識を持つと言える。

(1a) Você/vocês/a gente/ele/ela/eles/elas viu (viram) a Maria. — 主格
(1b) A Maria viu você/vocês/a gente/ele/ela/eles/elas. — 対格

このような意味において、とりわけ上記の形式に対しては、もはや主格代名詞

や対格代名詞という名称を用いることはできない。なぜならば、同じ代名詞が、文中のその他の構成要素と構築する関係によっては、主語の役割も補語の役割も果たし得るからである。

表１では、vós（およびこれに関連する補語の形式）について言及しなかった。それは、これらの形式は、現代ブラジルポルトガル語のいかなる変種の口語・文語においても消失しているためである。それらが用いられる時は、きわめて特殊な文脈 － 例えば、宗教に関する文脈や文学に関する文脈 － に限られ、ブラジル人が習得する標準語を特徴づけているとは言い難い。表１の太字で書かれた代名詞のように、いくらかの斜格形はまだ学校で教えられるものの、vós と関連する形式は、学校ですら教えられることはない。その理由は、仮に教えられたとしても、それらは標準規範やその他の規範の自然な状況下での話し言葉や書き言葉に取り入れられていないためである。

表１で示した体系は、ブラジルポルトガル語の口語および文語の標準規範の理解と効果的な教授に根本的な重要性を持つものである。それゆえ、当該分野の刊行物だけに留まるべきではない。この枠組みは、ポルトガル語教育における効果的、かつ有益な成果を可能にすべく、様々なポルトガル語教育および学習において議論され、研究されるべきである。人称代名詞の体系がいかに、そしていかなる理由でそのように構成されているかを知り、理解することは、実際にポルトガル語で人称代名詞が何を意味し、いかに機能するかを理解することを意味する。表面的に意味のない形式ばかりが記載された一覧について言及する代わりに、学生が認識し、理解できるように、母語で実際に使用されている代名詞だけではなく、現在あるいは過去のある時点においてきわめて特殊な文脈に限定されている代名詞も含めて、文語で優先的に用いられている代名詞をも学生に教示することが教師の務めである。

最終的に、学校教育の目的の１つが、様々な文脈ならびに言語使用域での口語および文語のテキストで用いられるよう標準ポルトガル語の使用を促進することであれば、vós の体系全体は、現代のブラジルポルトガル語を構成していないという現実を受け入れる必要がある。vós の体系を知ることや、結果的にそれを教授することが必要なのは、学生が過去の時代のテキストを読み、熟知するためである。それゆえ、現代のブラジルにおける標準口語・文語ポルトガル語では、eu/tu/ele/nós/vós/eles という体系にまとめることは断じてできないのである。

2.2 主語および目的語の性質とその現れ方

近年における数多くの社会言語学変異理論研究の成果から、現代ブラジルポルトガル語の主語と目的語の実現パターンが明確にされつつある。Tarallo (1983: 1996) は、ブラジルポルトガル語では、主語は明示されるのに対して目的語は省略される傾向にあるという理由から、他のロマンス諸語と距離を置いているということを示した。この Tarallo の研究以来、多くの調査が行われている。そのため、現代の口語および文語ブラジルポルトガル語は、主語と目的語の明確な実現パターンをすでに有していると言っても過言ではない。

一般的に、ポルトガル語の授業でなされる主語の性質と特性に関する議論は、定義や分類といった機械的な反復に限定され、その実践は、多様なポルトガル語の変種が存在する中で、ポルトガル語を効果的に使用したり、その使用に関して熟考したりするのに全く役立っていない (Martins, 2013a)。ことゼロ目的語となると、議論すらされていない。ブラジル社会言語学の調査で 40 年以上にわたって蓄積されたゼロ目的語に関する情報は、研究機関やそれらの研究機関によって出版された学術書の領域に留まったまま今日に至っている。

このセクションの目的は、初等教育や中等教育のポルトガル語の教師が授業で取り上げられるよう現代ブラジルポルトガル語の主語および目的語の性質、ならびにその実現パターンの様相を体系化することである。すでに確認したように、それらの言語表現が「いかなる理由で」「いかに」「いつ」そのように意味するのかといった疑問に基づく教育は、学生が、異なる規範を持つ文語と口語を効果的に、なおかつ意識しながら習得するのに大いに役立つと言える。

2.3 主語代名詞の現れ方

主語の明示性と非明示性は自然言語を定義する 1 つの特性であることに議論の余地はない。いかなる言語も義務的に主語を持つものの、英語 (it rains, it seems...) やフランス語 (il pleut, il semble...) のようにほぼ常に明示されることもあれば、イタリア語 (Ø piove, Ø parlo) やスペイン語 (Ø llueve, Ø hablo) のようにほぼ明示されない、つまり、ゼロ主語として実現され得ることもある。

ブラジルポルトガル語では、主語の明示性・非明示性は、主語の性質に関連している。具体的には、主語が特定のものか、不特定 (または任意) のものか、ないしは非指示的なものかのいずれかになる。Berlinck, Duarte & Oliveira (2009: 123) は、ブラジルの 5 つの州都 (ポルトアレグレ、サンパウロ、リオデジャネイロ、

サルバドール、レシフェ）の教養層の口語について言及した著書『ブラジルにおける標準口語ポルトガル語文法（*Gramática do Português Culto Falado no Brasil*）』（以後、GPCF）において、「現在のブラジルのポルトガル語は、混成型を呈している。すなわち、指示的主語は明示し、非指示的主語は明示しない傾向にあるといえる」と述べている。

Duarte（1993, 1995, 2003, 2007ab 他）や Duarte, Mourão & Santos（2012）の研究では、ブラジルポルトガル語は、共時的にも通時的にも、主語代名詞の明示を好むことが示唆されている。1993 年の Duarte の研究では、リオデジャネイロで 19 世紀から 20 世紀にかけて執筆された脚本の分析に基づき、人称によって条件づけられたと思われる主語の明示の頻度に一定の進展が見られるという結果をもたらした。具体的には、１人称と２人称の主語の明示率は、19 世紀初頭のテキストでは、それぞれ 31%と 17%であったが、20 世紀末のテキストでは、78%と 82%へと変化している。一方で、３人称もまたその頻度は明らかに増し、19 世紀で 7%であったものが、20 世紀には 45%へと変化した。Duarte によって示された結論では、動詞の活用体系の縮小（この縮小は、「人称代名詞の体系」のセクションで述べたとおり、代名詞の体系に新たな形式が取り入れられたことと関連している）が、人称の識別を妨げる原因の１つとなっているがゆえに、結果的に、主語代名詞がますます明示されるのであろうと述べられている。その変化の過程において、指示対象の意味素性[±人間]および[±特定性]が、３人称の主語の明示に重要な役割を果たすと考えられている。つまり、[+人間][+特定性]であれば、主語が明示される傾向が高くなると言える。

さらに、Duarte（1995）は、リオデジャネイロの教養層の話し言葉を分析し、脚本において 20 世紀後半に見られた割合と実に近い割合が見られることを確認した。その割合は、人称を考慮に入れるとさらに重要な違いを示した。具体的には、２人称では 91%、１人称では 75%、[+人間][+特定性]を備えた３人称の主語では 68%の割合で主語が明示されていたのである。

ブラジルの教養層の話し言葉に見られる指示的主語の明示頻度からこの増加が確認できる。GPCF で示されたデータによると、定形動詞文において、特定された指示対象を持つ主語の 78%は明示され、その割合は、人称に条件づけられていた。つまり、１人称単数では、(2)の例文のように、それが実現される割合は 76%で、１人称複数では、nós で 78%、a gente で 94%であった。(3)に見られるように、nós と a gente は、同じ発話内で観察されることもある。２人称単数では、

ブラジル教養層の話し言葉で優勢形である você は、(4)のように 85%の割合で明示されていた。コーパスでは、ポルトアレグレの話し言葉で代名詞 tu が 9 例だけ見られたが、それらの大半もまた明示されていた。2 人称複数では、唯一見られた vocês が、(5)に示したように、87%の割合で明示されていた。3 人称の単数 ele/ela と複数 eles/elas では、それぞれ 78%と 71%で、指示対象が[±人間]で強く条件づけられていた。指示対象が[+人間]の時は、(6)のように明示の割合は 84%にまでのぼっていた。

(2) Realmente **eu** tenho muito cuidado com esse problema de alimentação porque **eu** tenho uma facilidade enorme para engordar, sabe? (GPCF, 2009: 125)

(3) **Nós** não temos hábito justamente por **nós** não termos também condições financeiras. Aqui em casa **a gente** não tem por hábito de fazer quatro cindo seis pratos. (GPCF, 2009: 125)

(4) Aí João se **você** justificar da maneira, como **você** me respondeu, eu coloco correto. (GPCF, 2009: 127)

(5) **Vocês** têm a pergunta aí, não é? (GPCF, 2009: 127)

(6) Normalmente, quando a gente pede para [uma criança], de por volta de quatro a cinco anos desenhar uma mesa, **ela** põe o tampo que **ela** sabe que existe; **ela** põe as pernas para todos os lados. Por quê? Ora, se **ela** olhar de um determinado lado, **ela** vê duas pernas; se **ela** andar meio metro, **ela** vê outras duas pernas. Então **ela** põe pernas para todos os lados, por quê? Porque **ela** sabe que a mesa tem um tampo, que é onde **ela** põe as coisas e que a mesa está apoiada em cima das pernas... Agora isso aqui **ela** jamais vai poder ver: essa imagem da mesa. Então é isso é o que **ela** sabe. **Ela** está desenhando o que **ela** tem na cabeça e não o que **ela** está vendo. (GPCF, 2009: 128)

定形動詞文における不特定の指示対象を持つ主語についても、主語の明示の方が高い割合で見られる。具体的には、(7)のように nós や a gente で表された主語では 22%、(8)のように você の場合では 18.5%、(9)のように eles の場合では 17%、(10)のように se の場合では 14%であった。GPCF で示されたデータによると、不特定主語の非明示性は、3 人称の単数・複数ともに、教養層の話し言葉ではあまり重要ではない。以下の例文ではいずれも a gente が用いられているが、

不特定の指示対象を持つ主語が明示される傾向にあることが明らかとなっている。

(7) bom eu gosto não dessas músicas modernas agora que **a gente** nem sabe como dançar... eu gosto de fox... de tango... valsa, não é?... bolero também, mas agora **a gente** não ouve mais isso nada, né?... é tão engraçado, o pessoal dança, um aqui outro lá, **a gente** procura, nem sabe quem é o par... da gurizada... (GPCF, 2009: 133)

(8) Eu acho que a arte do retrato é muito difícil porque aí **você** exige a semelhança, enquanto, se **você** está criando, **você** não precisa colocar nenhum padrão, a não ser o padrão da própria obra, certo? Quando **você** cria um retrato, **você** está dentro da função naturalista. **Você** quer criar uma semelhança, que todo mundo olhe e diga "olha a Elisabete Segunda da Inglaterra, como está parecida", certo? Então é mais difícil do que **você** criar uma figura de mulher qualquer que **você** pode distorcer da maneira que **você** bem entender, que **você** pode pintar de vermelho. (GPCF, 2009: 133)

(9) Agora em Salvador tem assim restaurantes muito bons. **Eles** estão incrementando muito o turismo lá e **eles** servem muito bem, sabe? (GPCF, 2009: 134)

(10) Se na mulher **se** retira os ovários, retirando portanto a fonte elaboradora do hormônio feminino, as glândulas mamárias elas se atrofiam. (GPCF, 2009: 134)

上記に示した一連の例文が証明しているように、３人称の代名詞のほとんどが明示されており、そのことは、指示対象が[+人間]であるということと関連している。これは、いかなる教師でも、日常的に授業内、とりわけ、文章の作成を課する際に目にする現実であろう。ブラジルの様々な変種の話し言葉での言語使用と標準的な書き言葉の習得の間の関係について調査ができるよう、まずは、主語の高い明示率の裏には何があるのかを知る手段が必要である。

したがって、上述した研究は、非指示的主語は主語の明示を妨げる１つの文脈であるということを示している。それはブラジルポルトガル語には虚辞が存在しないためではあるが、そのことから、(11a)のように、天候を表す動詞が用いられる文や、(12a)のように繰り上げ動詞（parecer のような動詞）を伴う文や、(13b)の動詞 ter や(13a)の動詞 haver が用いられる存在を表す文では主語が明示されな

いのである。それでも、英語の it やフランス語の il のような虚辞を持たないがゆえに、ブラジルポルトガル語では、ゼロ虚辞を回避しようとその他の方法がとられることがある。具体的には、(11b)のように場所および時間を表す前置詞句ならびに副詞句の移動、(12b)のように従属節の主語を主節に繰り上げる方法、(13b)もしくは(13c)のように非指示的人称代名詞の使用などが挙げられる。

(11a) **Ø** choveu muito uma temporada quando a gente ia com o Sesc. (GPCF, 2009: 143)
(11b) **São Paulo** chove. **O Rio** faz sol. (GPCF, 2009: 143)

(12a) **Ø** Parece que o Brasil tem quinze ou dezoito impostos. (GPCF, 2009: 143)
(12b) **Os alunos** parece que tomam conta dos professores, ao menos é o que eu ouço contar, né? (GPCF, 2009: 145)

(13a) ... então **Ø** havia restaurantes que eles serviam assim um pouquinho de cada coisa... (GPCF, 2009: 143)
(13b) **você** tem frutas... **você** tem frios, eles servem suco, depois ainda servem café com leite. (GPCF, 2009: 149)
(13c) **Você** tem, em época de São João em Olinda, **você** ainda vê fogueira e como se vê fogueira! O olindense faz fogueira até em cima do calçamento. (GPCF, 2009: 143)

このように、ブラジルポルトガル語における主語の明示傾向は、非指示的主語を伴う文脈においても確認されてきている。実際に、(14)の例文で確認できるように、主語の位置である動詞の左側が常に主語の役目をする要素やその他の様々な性質の要素によって埋められる傾向にあると言える。

(14a) **Natal** choveu muito em abril.
(14b) **Abril** choveu muito em Natal.

注

[1] なお、本書に章番号等は付されていないが、本稿では便宜上、筆者が番号を付した上で説明をする。
[2] 表1における「斜格形」は、「対格」「与格」以外の格を意味しているのに対して、

本文中の「斜格形」は、主格以外の格、すなわち、「対格」と「与格」を含む格を意味するものと思われる。

参考文献

Martins, Marco Antonio; Vieira, Silvia Rodrigues; Tavares, Maria Alice. Contribuições da sociolinguística brasileira. In: Martins, Marco Antonio; Vieira, Silvia Rodrigues; Tavares, Maria Alice (orgs). *Ensino de português e sociolinguística.* São Paulo: Contexto, 2014.

彌永史郎(2012)「常用規範」彌永他『ポルトガル語文法用語小辞典』(http://gelp.ciao.jp/GLOSSARIO/paginas/home.html), 2019 年 2 月 20 日取得.